



年末年始、寒いシカゴを避けるようにして周りの同僚の多くはフロリダや南米などにバカンスに出かけていく中、我が家はずっとシカゴで過ごしておりましたところ、その間、シカゴ近郊は大変に寒く、ある店の駐車場から店舗までの間のほんの数分の距離でも外を歩くことが非常に辛く感じました。「ああ、これが噂に聞いていたマイナス 20℃の世界か」と思いつつも、一秒でも早く屋内に入りこむべく、自然と小走りになってしまいました。

我が家が年末年始にどこへも出かけなかったのは、このマイナス 20℃の世界を体験したいからという訳ではなく、第 2 子の出産予定日が 1 月 7 日であったことが理由です。予定日より 1 日早い 1 月 6 日に第 2 子誕生を迎えましたので、今回はその経験を日本との違いを中心にご紹介したいと思います。

○入院

出産予定日が迫った 12 月には週一回、検診がありました。検診にはほぼ毎回私も一緒に行っていたのですが、12 月末の検診の際ドクターより、もうお腹の中の子供も十分に大きくなっているためドクターが一日中病院にいる 1 月 6 日に生んでしましましょう、と提案がありました。つまり、6 日には特段産気づいていなくても陣痛促進剤を投与することにより出産してしまうということです。

まるで医師・病院の都合で赤ちゃんの誕生日を決められてしまうようなものですが、このような対応はこちらでは一般的なようです。我が家の場合には、実は 1 人目の出産（日本です）の際にも陣痛促進剤を投与し出産した経験があったこと（これは予定日を 1 週間以上過ぎててもまだ生まれてこなかったためですが）、また、そして何よりも慣れない土地で、いつ産気づくのかかわからない状態を不安に思いつつ待ちつづけるよりも、計画的に入院・出産が出来た方が安心できるということもあって、上記のドクターからの提案はむしろウェルカムでした。

○通訳

初診の時、入院した時など節目のときには通訳が入りました。私の語学力が不足しているためか、と少し落ち込んだのですが、これは特別なことではないようです。英語ネイティブでない患者さん用に、受話器が 2 つついた電話器が用意されていて、一つを看護婦やドクターが、もう一つを患者がもち、通訳者に電話をかけ 3 者で会話ができるようになっています。我が家の時にも病院側も慣れた感じで、「日本語ですよね。中国語とか韓国語とかいろいろあるんですよ。」なんて言われて会話が始まりました。医療のことなので誤解があった場合、医療過誤につながりかねませんので通訳を入れるのが正しい対応かもしれません。さすが移民の多いアメリカです。

○書類

もう、それは数多くの書類を渡され、サインを求められました。無痛分娩に係る麻酔のリスクや、退院後の母体／赤ちゃんに係る注意事項からカーシートの設置方法まで。病院側もチェックリストを用意していて、説明済みの事項についてはチェックをしてき、漏れがないようにしていました。当然のように、それら全ての説明を受けましたよ、という紙も用意されていて、サインを求められました。

○カーシート

上記にも触れましたが、乳児用のカーシートを準備することが求められます。赤ちゃんがある一定の体重に満たない場合、早産だった場合などには、病院側が適切にカーシートを付けているか検査します。

○入院期間

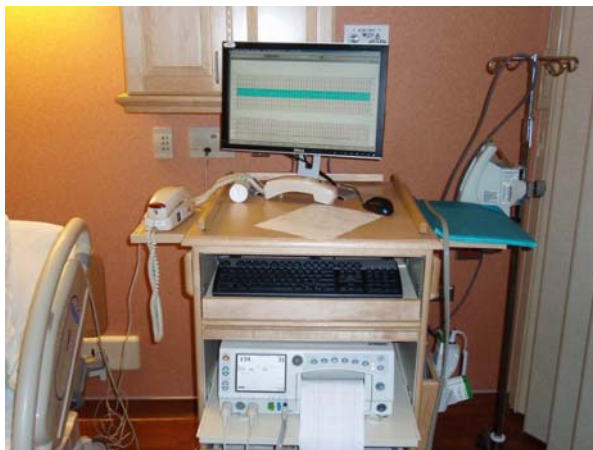
一番の違いはこれでしょうか。今回、帝王切開でなく通常分娩だったところ、水曜日の夕方に出産して金曜日の朝に退院するという2泊3日でした。退院後、家に戻ってから、小さく、まだまだしわだらけの子供を抱っこしながら、日本では考えられないと思っていましたが、一方で、病院に長くいるとそれだけ費用もかかりますし、また、病気の方が集まってくる病院だけにむしろ家の方が安全性が高いと指摘をする方もいます。

○費用

出産に限らず米国での医療費は高い(むしろ、日本が安すぎるという指摘もあるようですが)とされています。今回2泊3日の入院で、出産費用・出生児の検診等含め病院からの請求は約13,000ドルでした。米国に4,600万人いるといわれている無保険者は、これを全額自己負担しなければならないわけです。低所得者や無保険者向けに様々な補助制度が用意されていますが、それでも負担感は日本のそれとは比べ物にならないのではないのでしょうか。

ちなみに、生まれてきた赤ちゃんのへその緒を父親に切らせてくれる病院もあるようですが、私は遠慮させていただきました。

写真は、陣痛促進剤及び抗生物質の点滴と陣痛及び血圧の様子を自動的に測定するモニターです。ベッドの逆側には無痛分娩のための麻酔の点滴もあり、妻はさながら重病人のようでした。



ジェトロ・シカゴ・センター
産業機械部 松本 崇